

これらの問題点に関する発言として、1976年12月から日本の静止衛星が東経140°の赤道上に打ち上げられ、東南アジア（インドは含まない）、東アジア、南半球はオーストラリアまでの雲、（直下での分解能：1.25 km（可視）、5 km（IR））風（3 m/secの精度）、2°×2°の表面水温などの資料が提供できる（寺内）。モンスーンはインドだけの現象でなく、東アジア、ニューギニア、アフリカまで広大な地域に起こる（吉野その他）。大規模な循環からみた梅雨の研究、たとえば100 mb 高気圧と雨期の始期などインド東側の解析の必要性（斎藤直輔その他）が強調された。しかし、船を含め現地で観測することは困難とする意見が多く（宮田、高橋）、ネパールの通年観測は文部省の氷河に関する海外調査研究（5カ年計画）であるが、MONEXとも密接に関係していることが指摘された（中島）、また、岸保によると中国のMONEXへの参加はまだ見通しが立っていない。

一方、研究を進めるに当たって国際的な資料センターの設置を要望する希望が多く、これは岸保、新田がシンガポールでの第2回 MONEX Planning Meeting で何

らかの形で提案していくことにした。手近な問題としては、気象庁にある衛星写真、VTPRなどの資料を case study として利用できる態勢が明確でなく、個人的な好意に頼らざるを得ない現状が改善されるよう研究者の立場から訴えられた。

モンスーン自体の研究については、南半球や cross-equatorial flow の重要性（飯田、井沢その他）が強調された。シミュレーションについてはモンスーンの季節変動を熱源の主原因として考えてよいかどうか（片山）、延長予報には赤道付近の解析資料がどれ位とり入れないとならないか（菊地）など討論された。気研では数値実験を行うためのモデルの開発に切り替え、MONEXの研究に参加できる方向にあることが報告された（片山）。

討論のしめくりとして、今後も勉強会を続けてゆく必要がある一方、多くの会員の理解と協力を得るためにシンポジウムを開く希望も出され、作業委員会（斎藤直、丸山、廣田、新田、岸保、朝倉）で検討することになった。（文責：朝倉 正）

MONEX 第2回計画会議について

MONEX 作業委員会

JOC（GARP 推進母体の合同組織委員会）が主催する MONEX 第2回計画会議（Planning Meeting）は、来る10月28日から11月1日までシンガポールで開かれる予定である。第1回のイエレバン会議にくらべて、今回は最近任命された MONEX についての JOC の consultant である村上多喜雄氏（ハワイ大）を中心に、より広い視野の下に MONEX を考えようとしている。

この会議に提出される予定の MONEX 研究計画案の草案によると、大循環との関連でとらえたモンスーンから、メソ・スケールのじょう乱、更には境界層や海洋の影響などかなり広範囲な問題領域が考えられている。

MONEX は、FGGE と同じ時期（1977～78と78～79）に実施される予定だが、後者が global な立場からの研究観測実験であるのに対して、前者はそれからの deviation としてモンスーンをとらえようとしている。そのことをしっかり頭の中へ入れた上で、更に大循環との相互関係をも考えようというものである。

今回の会議には岸保と新田（尚）に招待状が来て、両名が出席する予定である。既に村上氏が起案した研究計画案が配布され、それについての意見を求められている。更に岸保は日本での MONEX 勉強会のこと、AMTEX の経験についてなど、新田は中規模じょう乱の研究、気象庁電計室で開発中の4層北半球プリミティブ・モデルによる梅雨期のシミュレーションの結果などについて報告する予定である。

日本としての MONEX に対する最終的な態度は、シンガポールの会議の結果を充分検討した上で決定することが、9月12日の GARP 分科会の FGGE 小委員会で確認された。勿論、別掲の MONEX 勉強会で発表された解析、シミュレーション、気候といった方面の仕事は国内で独自にやれるものだが、問題は MONEX の一環として考えられる観測計画の方にあり、わが国がこの観測計画でどの程度の貢献をしようかは今後の課題である。（文責：新田 尚）